

記憶を失うとどうなるのか？

「交通事故にあい脳の中まで出血する」

坪<sup>つほ</sup>  
倉<sup>くら</sup>  
優<sup>ゆう</sup>  
介<sup>すけ</sup>



## プロフィール

一九八九年 大阪芸術大学に入学。その年、大きな交通事故にあい、すべての記憶を失う。一九九六年 京都の染色工房に弟子入り、二〇〇一年 作家デビューを果たす。二〇〇五年 ゆうすけ工房設立。現在、染色作家として、全国で作品展示会などを開催。

○司会 ただいまより令和四年度講座「生きること」の第一回目を開催いたします。本日は、お忙しい中ご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

講演に入ります前に、本日お招きしました講師、ゆうすけ工房の坪倉優介さんのプロフィールをご紹介します。坪倉優介さんは、一九八九年に大阪芸術大学に入学されましたが、その年に大きな交通事故に遭い、すべての記憶を失いました。その後、京都の染色工房に弟子入りし、二〇〇一年、草木染作家としてデビューを果たされました。二〇〇五年にゆうすけ工房を設立し、現在は染色作家として全国で作品展示会などを開催されています。その一方で、記憶喪失を乗り越えた体験を語り、命の大切さを伝えるため、講演会やテレビ番組などに出演されているほか、「記憶喪失になったほうが見た世界」という本も出版されています。また、最近はこの本を原作としたミュージカル「COLOR」も上演されたばかりです。

それでは、坪倉さんをお迎えしたいと思いますので、拍手でお願いいたします。（拍手）  
○坪倉 優介 それでは、皆さん、今紹介をいただきました坪倉優介です。どうぞよろしくお願  
いします。

今、こんな感じで元気にしゃべらせていただくんですが、今回、皆さんとお話するのは「生きる」ということ。皆さんが持たれている、今こうして足をお運びいただいてお会いするっていうところにも生きる意味、今日、皆さんと過ごす意味を感じていただきたいと思えます。特にこうして本来出会うことがなかった我々が、人とのつながり、人との縁で、皆さんの人生の巡り合

わせで、坪倉優介と会うという時間を作っていた。これを単純に運命というような言葉を使われる方もいると思うんですが、そういった一言で表すことのできない、すごく皆さんと縁を感じています。なので、今回は、一時間半ほど、少し僕とのお話に付き合っていたらと思います。じっくりと聞いて、「ああ、そういうことをした、経験をした人がいるんだ」、「そんなふうに人間でなるんだ」っていうふうに聞き入っていただけなのはすごくうれいんですが、「えっ、それってどういうことだろう」、「そうだったらどんなふうに思うんだろう」っていうふうに、多分皆さんが経験されたことのないような僕の経験も聞くことになると思います。そのときは遠慮なく、最後に質問コーナーを考えていますが、今すぐ聞きたい、この先話を聞く前にちょっと確認したいと思う方は、遠慮なく手を挙げてください。そういった部分も答えて、また皆さんの思う疑問も含めて、皆さんが普通に持たれている人間の記憶、当たり前のように記憶ができる、「いやいや何か最近年を取って何か物覚えが悪くなったな」とか悩まれている方がいると思うんですが、今日は僕の話聞いて少し頭に刺激を感じて楽しんで、また今日からちょっと生き方の違う視点を持っていただけたらと思うので、今日の話は関心ではなく、興味ではなく、刺激にさせていただきたいと思います。

僕は、一九七〇年、ちょうど昭和四十五年、皆さんが何か大阪万博だとか、日本のこれからの変わりようであるというので、世界的にざわついていた頃、十二月二十五日に大阪で生まれました。坪倉日出夫、坪倉慶子の間に生まれた、僕、長男です。その後、昭和四十七年、昭和四十八年

と続いて、妹、弟と生まれて三人兄弟の五人家族です。初めて家庭を持つてこれからつてときに、しかも子どもが三人いてわくわくして生活が始まる。皆さんもこれから生きていく部分で、ひとり暮らしであつても、また連れができて、家族を持つても、やっぱりそこから先の未来は想像ですよ。大変なことも考えるときもありますけど、わくわくして自分の未来を描く。そして今日来た皆さんも、これからまだまだ人生続くので、僕のモットーとして、すごく楽しんで生きていただきたいと思うんですね。うちの家族もそうです。楽しくつてわくわくした生活を想像しながら、長男の僕はなかなか言うことを聞きません。どちらかというとなんばくいな男の子に育っていききました。学校の先生の言う、決まった漢字、決まった数字、「何で『一』は『いち』って言わなきゃいけないの?」、「何で『一』と『一』を足したら『二』っていう音が変わるの?」、そんな訳の分からない質問をする子どもだったと最近会つた先生たちに言われました。大人の決めた国語、算数、理科、社会をなかなか納得できない男の子だった僕は、すごく自分の自由でできる、好き勝手に動き回れる体育と、好き勝手に自分の思つたものを描ける美術、図工の授業が好きだったらしいんです。そういうことで、中学、高校、美術の授業だけはすごい点数が良かったらしいです。大学に行くにも、行くんだつたら描ける学校に行きたいからというので、僕は一九八九年、大阪芸術大学を受験することにしました。大学受験は生まれて初めてです。すごくわくわくしていたらしいです。この辺の過去を話す僕が、「らしい」っていうのをお話するのは、今の僕には全く身に覚えもないし、記憶もない。後から親とか友達に聞いた話で、「そんなふう

に喜んでいたよ」、「そんなふうを考えていたよ」、「そんなことを言っていたよ」なので、ちよつとこの辺の自分は想像しかありません。何となく言葉で思い浮かべているんですが、そうして思ったときの思い出、映像が全く出てこない。今話してる間も、自分の中で悩んでいますが、この時点、映像は真っ黒です。ふつと真剣に考えると想像がつかなくて頭の中が真っ白になることが多いんですが、自分のその、あった、あるべき過去を引き出そうと思うと真っ黒になるんだなっていうのを今感じています。

その当時の一九八九年、少しバブル世代ですから、めちゃくちゃ受験生多かったです。今日のこんな会場みたいにずらつと大学の大きな教室の中に、鉛筆を持って生徒たちが並ぶんですね。正直、僕、いろいろ興味を持つ好奇心もあったらしいので、普通の学校も二、三受験したらしいです。そのときの思い出を記したメモを見つけました。「何かすごく真面目そうな勉強熱心な生徒たちが、その教室に行きながら鉛筆をかりかりかりかり、何かそれ自体がドキドキしない、何か自分の興味が湧かない、これからの大学って何なんだろう」っていうふうなことを書いていました。ところが、その後の芸大ですかね、芸術の受験のときについていたら、もう最初の文章からわくわくした。何かっていったら、英語とか、ほかにも文章で書く受験であるんですが、芸大はいきなり違いましたね。デッサンをするとかデザインをするっていうのがテスト。美術が好きだった、絵を描くことが好きだった僕としては、もういきなりその時点でわくわくしたんでしょよね。ところが、自分の中では全く生まれて初めての大学の受験、芸大の受験ですから、高

校のときに使っていた絵の具、せいぜい持っていた筆箱を持って受験に挑んだらしいんですね。ところが、みんな美術学校に行った者とか、もう家族代々から絵描きだった人たちが受験に来てたんでしょね。受験のテーブルに、それまでの筆記用具を置くのと違って、ずらっといろんな見たこともない種類の絵の具を並べる。とてつもない数の鉛筆を並べる。その中で僕が印象に残っているのは、コップですかね。あと、膨らませる風船、あと布きれ、それを鉛筆で描きなさい、そういうたあたりふれたものだったので、すつと描いた形、これを面白いと、芸術と表す。

「母さんどうしよう。こんな大学に行けたら、僕毎日が面白くなりそう。わくわくして仕方がない」っていうふうに伝えたのが、母がすごく良かったと。あまり勉強が得意じゃない、自分が産んだ初めての子がいろんなことで苦労したけど、やっと大学生になったんだな、しかも、好きな学校に喜んで行ってくれるんだって、すごく感動してくれてたらしいです。

そのまんま一九八九年の四月、無事大学に受かって、学校、すごい大阪の南のほうです。皆さん御存じかもしれませんが、PLの花火、夏にありますよね。そのPLの塔の近くに大阪芸術大学はあります。そこまで通うのに、僕、大和田だったので、そこから京阪に乗って京橋へ行きます。京橋から環状線に乗って天王寺へ行きます。天王寺で向かいの近鉄電車に乗り換えて、阿倍野からPLのところまで行きます。そこから芸大のバスに乗ります。通学に二時間半かかってました。気軽に行ける距離ではなかったんですが、もう毎日わくわくして仕方がないので、通学の時間もすごく充実していると、電車、乗り物の苦手な僕が、乗り物に乗ることにすごく喜んでい

たと母は言いました。

ところが、その六月です。大学に入って二か月後ですよ。やっと友達できました。いろんな形で授業が面白くなりました。中学や高校と違って美術の学校でって、うきうきしていました。なのに、その六月、一番最初の週に僕、寝坊してしまいました。美術の授業ですから、いろんな絵を描く宿題がたくさん出るんですが、三つも四つも絵を描かなきゃいけないので、その日徹夜になってしまいました。朝方まで絵を描いていた僕、うっかり、あつ、もうそろそろ学校に行かなきゃっていうところで気を抜いたんでしょね。ちよつと寝てしまいました。ところが二時間半かかるので、残されたのは二時間弱、もう切ってます。電車に乗っていても授業出席に間に合いません。「どうしよう、母さん」っていうことで、僕が選んだ手段は、生駒山上、ずっとその道を真つすぐ四條畷とか通って石切のほうまで抜ける外環状線という、ずっと大阪の下のほうまで真つすぐ延びた大きな道です。そこをオートバイで走ると一時間半弱で行けるんです、大阪芸大って。なので「母さん、ちよつと電車では学校間に合わないけれども、僕やつぱりテストに間に合わせるように行きたいから、オートバイで学校に行つていいか」って。

僕、正直オートバイの運転には自信がありました。実は中学生の頃からオートバイに乗っていました。「えっ、中学生で」って、「免許ないのに」って思われるかもしれないですけど、大丈夫です、暴走族ではなかったんです。僕、実は生駒山上遊園地のちよつと手前にモトクロス場があつて、山の中をオートバイで跳びながら走るレースのレーサーを中学生からやっています。



何がきっかけで、父親が趣味でモトクロスという山道を走るオートバイをやったものですか、子どものとき、たまたま生駒山の上にある室池という池に釣りに行った僕が、オートバイで走っている父親を見つけて、僕も一緒にやりたいということ、中学二年生から一緒に。うれしかったです。父親と同じ趣味が、ゴルフとかじゃね、ちょっと子どもの僕には難しかったし、パチンコとか、未成年の僕が行けるものではなかったんですが、たまたま父親はそのオートバイの趣味を持っていたので、これ自体は競技なので免許は要りません。その道を守るための講義を少し受けたら、誰でもモトクロスというレーサーになれた。なので、父親とのレースに夢中になっていました。高校になる頃には日本代表の二十人の一人のメンバーに加われるだけ腕を磨くことができました。

そんな僕ですから、オートバイにはちょっと自信がありました。道を走るのは危険だと思ったので、ちゃんとグローブしました。ちゃんとしっかり頭からかぶるヘルメットかぶって行きました。僕の運命が変わったのは、このようにちゃんとした格好をしていたからだと思います。一九八九年、大学に二か月行つての六月八日、一番最初の一週目、少し曇り空の中、僕はスクーターを飛ばして学校に行きました。できるだけ安全運転で気をつけて行きました。おかげで授業には間に合いました。テストも受けることができました。提出物も出せました。すごく安心したんですが、先ほど言いましたよね、僕その日、徹夜で作業していました。少しちょっと眠い気もする。でも次の日の授業の準備、慌てて来たのでしていません。今日間に合わせても明日間に合わなけれ

ば意味がない。意地でも家に帰らなきゃいけない。友達はすごく心配して、「もう俺の寮に泊まって明日一緒に学校行こう」って言われたんですが、授業の準備があるから、「僕やつぱりオートバイで帰る」って言って、帰りました。もう授業に間に合うかどうかって心配しなくていいので、できるだけ慎重に、すごく安全に運転したつもりです。そんなにスピード出さずにゆっくり慎重に帰っていました。周りもちゃんと確認しながら運転していたときに、突然、大学から出て三十分たない辺りで、ブルドーザーとか積む特殊トラクターという大きなトラックが、暗闇の道に出てきました。トラックに乗っている人も視野が見渡せない状態だったのか、車ではなくスクーターなので気づいてもらえなかったのか、僕ももういきなりぱっとトラックが出て「危ない」と思いました。ただ、あまりにもお互いが出たタイミングが同時でした。避けられない、自分の中で、多分そんな状況だったと思います。そのまま僕のオートバイはトラックの下にすばっと入って突き抜けました。でも、乗っていた僕、一緒には突き抜けませんよね。そのまま全身にトラックがぶち当たってしまいました。僕は大きな金属バットで殴られたような状態、吹っ飛ばされるんですね。国道のところには、ガタガタガタと吹き飛ばされた状態なので、いまだに体のあちこちに傷は残っています。もう本当に捨てられたごみくずのように、アスファルトの上に体が打ちつけられたんだと思います。骨は折れて、身は削れて、また場所によっては身がほぐれてしまって、そんな状態で僕は六月に道路に横たわる形。もうここから運命ですよ。ヘルメットかぶった中で、あとで発見されたヘルメットの中は血だらけです。もう着てい

た上の服も下のズボンも血だらけ、真っ赤っかに染まっていく、もう何もかもが一瞬にして真っ赤になっていく人間が道路の上に転がっていた状態で僕は発見されました。慌てた人は救急車呼びますよね。もうこれは助かる状態じゃないというので。来た救急車の方も、これも運命でした。「この子はこの辺の病院に運んだのでは助からない。これはちょっと高速を飛ばして、大阪市内にある府立病院へ。この子は強く頭を打ってるかもしれない。脳内出血を起こしているかもしれない。なので命を助けるために、その脳の専門医のいる大阪府立病院に運ぼう」という判断をしてくれる救急隊員と出会った。これが今、僕がここにある運命の一つ。

人と人との出会いで人間は本当に生かされる、殺される、いろんな形が変わる。自分一人で生きていければ気軽なのに、自分だけだったらのんびりできるのになって、ふっと思うことあると思うんですね。なかなか意見が合わずに、すごく腹立たしく思う感情になる自分との対決もあると思うんですね。でも、いろんな人と人とのやり取りで多分皆さんも生かされる運命をたくさん歩んでると思うんですね。僕はその救急隊員に会うことで府立病院に行きました。そこにいた医者との判断で、でもなかなか手のつけどころがない。縫ってどうか、移植してどうか、そういう問題ではなく、まずこの子が意識を戻さなければ生きた形にはならない。息も止まりかけている。もう脳死状態かもしれない。すぐに親は呼ばれました。父も母も緊急病棟に駆けつけました。そのときに、すごく僕は、これは想像でしかないんですが、すごく母にショックを与えてしまったなと思います。だってそうですよ。自分が育てた子どもが、すごくうれしそうに大学に

行く。「母さん、行ってきます」。六月のその日もすごく笑顔で学校に行きました。ただ、「電  
車じゃなくてバイクで行かせて」。 「もう仕方がないね」 って笑いながら母は見送ってくれたは  
ずです。その自分が「やっぱりあのときバイクで行っていいって許可をしたがために、この子を  
こんなことにさせてしまった。あのとき、『うん』て言わなければ、『遅刻なんてどうでもい  
い』 って言っていれば、この子はこんなふうにならなかつたのに」 ってすごく僕の母は自分を責  
めたと思います。本当はね、そのときに行って、しかも寝坊してしまつた、悪いのは僕です。母  
にそんなふうと思わせるつもりはなかつた。人生やり直せるのなら、あのときバイクで行かずに、  
どうあつても電車で行きたい。僕が少し後悔するのはその部分だけです。でも、人間歩んだ部  
分、進んだ形にやり直しなんて利かない、巻き戻しなんて利かない。だから、今の僕は前向きに  
前進に進もうと思いますが、そのときはまだ分からな。むしろ意識がない、脳内出血起こして。  
緊急病棟なので面会時間は一時間だけです。その限られた時間に自分の生活するバランス、リズ  
ムを変えて、必ず父も母も毎日欠かさず僕の見舞いに来てくれたそうです。その来てくれた中で、  
毎日母は僕の手を握って、「優介、優介」 って名前を呼び続けてくれてたみたい。もう僕の中で  
生きるか死ぬかの、もうすごいどんどん脳は脳内出血起こしてるんで腫れ上がって頭蓋骨にばん  
ばんに。その当時のレントゲンを見たら真っ黒です。僕の脳は真っ黒な写真ばかりです。

皆さん、今写真を撮つたらちよつと白い脳にしわしわのぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃつてなつた、  
もう普通テレビでよく見る脳の形のレントゲンが出るみたいです。でも僕は、頭蓋骨の中まで血

で脳がつかっているのです、その血に反応してカメラで出来上がった写真は真っ黒でしか映っていませんでした。脳が息ができない。しかもそれによって腫れ上がってどんどん頭蓋骨に押し潰されて、もうこのままでは生きていけない。医者は判断しました。「このままではこの子の命は危ないので、頭蓋骨を開きます」。多分ここの鼻の下の線を切って、皮めくるんですね。骨を出すことに。これで生きれるんですよ。すごく怖いですよ。その状態でこの辺から頭蓋骨を開いて、脳の炎症が終わるまで脳を外に解放するという判断。「これによって命は何とかなるでしょう。でも、そのまんまもう一度脳を戻して頭蓋骨を閉めて皮をかぶって縫った結果、どんな人間になるのか分からない。どんな障害が残るのか分からない。でも命だけは何とかあります」。その選択を医者は親に任せました。もう即答で父は言いました。「この子は絶対自力で治るから、絶対この子はしっかりと治るから、一切この子には傷をつけるな」と。「必ず生きて帰る。だから何もしないでくれ」と。父親は決めました。母はもう心配で必死になって手を握って名前を呼びました。その声ですかね。僕は医者の方と聞いたことがない。どんなすごい機械で治療をされていて、見たこともないロボットに囲まれたような状態で、めちゃくちゃ怖いっておびえていたかもしれない。ですが、目を開くことのない、意識のなかった僕が、耳は生きていますか。ふっとその母さんの声を聞いて安心できたのかもしれない。もしかしたら、その手を握ってくれたぬくもりですかね。子どもの頃からずっとそばにいて、ずっと抱いてくれて、手を引いてくれていた母さんの手触りとかぬくもりを感じたんでしょうか。ずっと、そのときの、

動くことのできなかった僕が、医者はどうしようもできなかった僕が、すごく弱々しい手で母さんの手を握り返そうとしたらしいんですね。それは本当は気のせいかもしれない、本当はそうじゃなかったかもしれないんですが、母さんはすぐに叫んで、「先生、来てください。今優介が動きました。今確かにこの手が動いたんです」。あの時母さんが、「ああ、どうなったのかしら。えっ、何か手動いたかな」と、安易に捉えていればこんな形にはならなかった。それは運命ですよね。ちよつとしたことにも子どもものことを思いやる気持ちのあつた母の叫びが、今僕がここにいるもう一つのターニングポイントになつたと思います。

そのおかげで医者は駆けつけて、「優介さん、大丈夫ですか、声が聞こえますか」って話しかけたんですが、その後、やっぱり僕はびくりとも動かなかつたらしいです。なぜ、そのときだけ、その瞬間に僕が動くことができたのか。それがおなかを痛めて僕を産んでくれたお母さんと子どもとのつながり、言葉では表すことのできない見えない力ですかね、それはすごく今でも感じています。ふだんでも、ちよつとした表情とか言葉を交わすことで、すごく母さんには安心する気持ちを与えていただいています。その見えない力、不思議で仕方がないんですがね。答えは見えないのですが、もうそれをずっと浴び続けていたい気ではいます。実際にそこで僕の頭を開く手術は止まりました。後は僕の自力です。これからここで生きるといふ、もう一度生きるといふ運命をつなげるきっかけになりました。

皆さんにもいろいろ大変なことあると思います。生きるか死ぬかのつらい部分もあると思いま

す。毎日のように震災でどうか、いろんな問題は起こっています。でも、乗り越えることです。乗り越える力、乗り越える勇気で、さらにその先にすぐ面白いことを切り開くことができる。でも、生きていかなかったら、そこで自分の運命が終わったら何もかもが終わりです。真っ白になってしまいます。それは少しもつたいない。生きているとつらいこと以上に面白いことがたくさんあるっていうのを僕はそこから感じるきっかけになりました。

手術が止まった僕は、緊急病棟にいます。生まれた赤ちゃんのような状態です。体を動かす。ある日、目を開く。助かることはできたんですが、僕は、やはり大きな事故をしたことで何らかのやっぱり代償を、今までとは違った運命を背負う形になりました。僕にそのとき与えられた代償は、まず、植物人間。物を聞いても、物を与えても反応することのない、生きている、生きていくけれども全く動くことのできない植物と同じですよ。

皆さんもガーデニングとかされてる方いますか。話しかけたりしながら水をやってたりする人もいます。ずっと見ていると葉っぱを開いたり花を咲かせる。それを見て植物も生きていくっていうルールを人間は作りましたよね。まさにその状態。何となく生きていることからの始まりです。それでも母親は毎日会いに来てくれました。いろんなことを話しかけてくれました。それによって僕もだんだん反応したい、答えたっていうことに必死になっていました。ところが、植物人間というステージを乗り越えた結果、僕、記憶喪失になってしまいました。やはり脳が血だらけになった状態なので、カセットテープやレコードのようにリセット

です。

皆さんの記憶喪失のイメージはどんな感じですかね。テレビでよくある、「あれっ、ここはどこ？えっ、私誰？えっ、今まで何してたの？」正直、体験した僕からいうと、名前だけ分からないとか、いる場所だけが分からない、そのポイント、ポイントだけが抜ける記憶喪失って、まずないなって思います。どっちかというところ、軽く脳の表面的ダメージだったら、「あれ、さっきまで何してたっけ？あれ、何で私ここにいるんだろう？」っていう少しの記憶を忘れるんじゃないかなっていう気がします。皆さん思い返して、五年前に何があって、十年前の十月三日に何してたなんか覚えてませんか。ちょっとさっきのことを忘れても、十年、二十年忘れても、とりあえず何か自分で忘れた気がするっていうぐらいで流されると思うんですね。しゃべれるのであれば、歩けるのであれば、まあ、明日からも何とかかなると思います。けれど、僕は重度の記憶喪失、完全に覚えていたものが何もかも失われました。覚えていたことを忘れたらどうなるか。「お母さん」とか「お父さん」、意味が分からない。知らない。そんなこと当たり前なんですけど、人間で思う、「あいうえお」とか、「一、二、三」、小学校、中学校、高校と一生懸命に勉強してきたのに、僕の中でその頃に何をしてどんな学校に行ってたのか、いまだに分からない。事故をした十八年前の記憶はいまだにありません。ここまでしゃべるのに、今皆さんと講演会でっていう形でここまでくるのに、三十年以上かかりました。やっとここまで。

二十年前、展示会に行った頃は、こうして皆さんと目を合わせる、目を見ることが怖かった。



その目を通して何を思い、何を考えているかを感じてしまおう自分が怖くて、いつもおびえている。びくびくしてる自分はどうもむきながら、しかも、まだ二十年前は考えながらしか言葉が出なかったの、「きょうは、ぼくの、はなしを、きいて、くれて、ありがとう」というような感じの展示会であり、説明会になっていました。

さらに、もうその三十年前とかつて、もう人としやべれない、人が怖い、もう本当にただただ、動きながら何かをする赤ちゃんのような状態から始まりました。両親も後から聞くと、記憶喪失になることなんて想像もつかなかった、テレビで見たようなものぐらいしか知らなかった。だから今までしたことをやらせてあげれば、今までしたことを教えてあげれば、いつかどこかで記憶が戻るかな。僕自身は全く物事が考えられないので、親の言われたことを何となくやっていた。

「これがスプーンで、右手で持つて、左手でお皿を持つて、スプーンですくつて、口に入れてかむの。それが『食べる』っていうこと」っていうふうには、一つ一つ動作を音にして教えてくれました。もうこの積み重ねです。赤ちゃんのようなその積み重ねを、大学に受かった十八歳の僕が、そんなことから始めて、三十年でもあればここまでしゃべれる。今日の自分もこんなにすらしゃべってる自分にびくります。これ僕の中で今日めちやくちやすらすら。必死で、そう言っていると何か自分でうれしくなってしまう。ただ単にみんなとしやべることですが、僕こんなことでもすぐうれしい。皆さんの中でのしゃべることが当たり前っていうことを、こんなにたくさんの方に聞いてもらえる話ができる自分が、もうすぐうれしくて仕方がない。こんなこ

とで一日充実できるんですよ。

皆さんの中でどれだけ充実して一日を楽しめますかね。当時、しゃべることとか食べることも大変でした。その日、銀色のスプーンで、白いお茶わんで真っ白のご飯食べたんですね。僕の中でそれを「ご飯」て覚えました。僕のもの覚え方、そういう始まりでした。記憶をなくしてものを覚えるってこういうこと。銀色のスプーンで白いお茶わんに入った白い食べ物「ご飯」なんだって。でも次の日変わりましたね。スプーンじゃないんです。ある茶色い棒、箸っていうんですかね、お箸。皆さんの中ですごく当たり前にやっけて、何となくこれもこれもだと覚えてはいるんですけど、僕も当たり前のように流して、「うん、そうですね」って当たり前のように言ってるんですけど、めちゃくちゃ不思議で仕方がないんですね。「箸」と「お箸」が何で一緒なんだろう。箸に「お」ってつけるのが何で意味があるんだろう。敬語だとか丁寧語だとかどうでって、その箸の前に「お」ってつけるのは何だろう。「あ」じゃ駄目なのか、「あ箸」、「か箸」、何か「お箸」って響きがいいなっていうふうに、皆さんが当たり前にされてる一言一言に、僕すごい疑問が湧いて、いろいろ考えて、一日一日、頭の回転ですごく大変です。三十年たっても、僕、中学や高校に行った気がしない。五十歳過ぎていまだにその一言一言、皆さん、会話で、ここまできて、ここまで言葉を感じたので、「ああ、そうですね」って当たり前に話してるふりしますが、いまだに皆さんが当たり前に話す言葉に必死です。そんな僕が、ご飯を食べる。次の日お箸で出るじゃないですか。しかも、白い器じゃなかったんですね。母さん、その日、青いお

茶わんにご飯を入れてくれたんですね。白いご飯につて入れられたものが何か雰囲気違う。「母さん、これ何?」「それもご飯よ」「えっ、昨日のと色が違うけど、これも『ご飯』つていうの?」「そう、ご飯」「何か味も違うけど」皆さん何となくご飯つて流していますけど、ちよつと今日のお米硬いとか、ちよつと甘みがあるな、やっぱり私は新潟のお米が好きだなあとか、いろんな形で味わい楽しんでますよね。そういつたご飯一つでも記憶でつていくと、もう何もかもが、ご飯だけでこれだけ皆さんびっくりするぐらい語つてしまいます。「昨日ご飯食べてん」で済むどころじゃない。ご飯だけでこれだけ語つてしまいます。

じゃあ、どうしましょう、晩ご飯。ご飯出ますよね。肉出ますよね。サラダ出ますよね。みそ汁出ますよね。みそ汁の具材つて毎日変わるんです。今日も朝から頭がパンクしそうでした。でも、「みそ汁気にするな。ご飯気にするな。今日の朝ご飯気にするな。今日はみんなと話す『生きる』ということで頭いっぱいにしとかなくっちゃ」つて、もういろんなことに気がいかないように必死でした。僕、ふだん電車に乗つて、しかも京阪電車ですかね。枚方に来ることつてあんまりありません。僕、ふだん仕事場、難波です。なので京阪電車、新鮮でした。緑の電車ほとんど走っているのにオレンジ色の電車もあるんですね。「あつ、あんな色の電車もあるんだ」つて。皆さん当たり前で見えません。僕めちゃくちゃ感動してしまいました。色が違うだけで何か特別な電車に見えるんですよね。しかもすごいスピードで通過していききました。めちゃくちゃ速い電車のようなイメージです。そんなことだけでわくわくするんで、毎日大変ですよ。事故してか

ら三十年たちましたが、コンビニに行っても、電車に乗っても、道歩いてても、もう感動するものがいっぱいの上に、今回も、「いいのか、僕のこんなご飯の話で」。こんなにたくさんの方がこっちを見て真剣な眼で聞いてくれる。めちゃくちゃうれいしいです。ありがとうございます。

そういう感覚でいろいろと進めていくんですが、なかなか物事を覚えられません。しかも記憶はなくなる。覚えるっていうことを僕忘れてしまっていたので。記憶をなくすってそういうことです。一から覚えるだけではなく、今言った「ご飯」のように、次の日見てしまったものが違ったもの、青い器に入っても白い器に入っても「ご飯」って言うんだ。でも晩ご飯、「ご飯」の前についたもの、食べる時間だけで昼ご飯、朝ご飯って変わったものの中で、魚、肉、晩ご飯、「ご飯」って言うけれども、お米じゃなくって肉、皆さんのこれだけ当たり前のように使い分けられている言葉を、もう成長する中で皆さんすごい数を覚えられて、それを会話にされてるんですよ。僕、それ一から覚えなければいけませんでした。いまだにぐっと覚えていきます。その中で言葉は一つ一つ賄うんですが、「寝る」って何でしょう。人間ですから、覚えたことの中で「寝る」とか「食べる」、それも忘れてしまいました。「食べる」は何となく言われた中で、「そろそろお昼にします」、「そろそろ食べます」、自分から「これ今食べる」って言っているんだろうか、「おなかすいていいんだろうか」って言っているのか、いまだに分かりません。

なので、先日も、先週、御存じの方もいると思いますが、僕この枚方で仕事していました。ご飯のタイミング、やっぱり分かりませんでした。「先生、そろそろお昼どうぞ」「あつ、今おな

かすいてるって思っているんだ。食べてもいいんだ。これ食べれるのって何ご飯って言うんだろ  
う。時間的に昼ご飯って言うていいのかな。ちよつと遅くなつたけど晩ご飯じゃないよな」って  
思つたら、「お弁当」って言われたんですね。三十年たつて今さらの感動でした。「うわっ、  
『ご飯』っていうものじゃなくて、食べるもので『弁当』って言われるものが出るんだ」  
ちよつとも僕ドキドキわくわく、「うわっ、『弁当』って『ご飯』と違ってどういうもの？」  
なんて、めちゃくちゃわくわくするんですけど、もう子どもだったら、「うわっ、『弁当』って  
何だろう？」って言うていいと思うんですけど、五十過ぎるとあんまりそういうこと言うと皆さ  
ん引かれるので、めちゃくちゃドキドキしているふりはせずに、「あっ、お弁当ですか。はい、  
いただきます」そう言いながら、毎日、「わっ、今日はハンバーグが入っている」、「わっ、今  
日は何だろう？」、「これ何の魚を焼いているんだろう？」って、すごくわくわくしながら食  
べていました。ただ、駄目ですよ。僕、その弁当だけで二時間も三時間も感動してられるん  
です、仕事なので早く食べて仕事場に戻らなきゃ。大人って大変だなんて思います。

食べることだけでこれですから、「寝る」って何でしょう。今日も僕、皆さんと会う部分で、  
ドキドキして仕方がありません。「わっ、今度はどんな人たちと会えるんだろう？」ってすごく  
わくわくしていました。皆さんとすぐく会えて、もう今もめちゃくちゃうれしいです。こんな気持  
ちを押し殺して寝る気に全然なれない。皆さんそれでも毎日寝るんですよ。決められた形で寝  
ようとするとすよね。どうしてるのか後で教えてください。ここは僕の質問です、本当に。

「どうやったら寝れるのか」って。寝ようと思える。寝れる感じ。「夜だから寝よう」って何で思えるのか。「昼なら寝よう」、「朝なら寝よう」っていうのは思わないのに、「夜だから寝よう」って思って寝れるのがいまだに僕分らない。なので、ふだんいると、作ることもか、こうして新たな出合いの部分で、一人でいたら寝ることよりもわくわくすることばかり考えてしまうので寝ない。でも、これよく注意されます。人間って不思議ですね。一週間寝ないと倒れてしまいます。僕、去年十一月もぼてんと倒れてしまいました。一週間寝なかつたんですね。病院の先生にも言われました。「坪倉さん、今日寝ましたか?」「寝ていません」「昨日寝ましたか?」「寝ていません」「えっ、いつ寝たの?」「先週ですかね」「君人間じゃないね」って医者に言われたのはちよつとショックでした。人間じゃなかつたら僕何なんだろう。そういつた当たり前のことっていうのが、いまだに僕はできません。皆さんの決められた形で。もちろんこのままでは体が故障します。なので、こんな変わったやつになるんだつたら寝なけりゃいいのか、食べなきゃいいのかっていう答えは皆さんにお勧めはできません。ただ、そうして人間の何のルールもなく昔から決められた「一日三回食べる」、「毎日寝る。寝る時間が四時間であるうが七時間であるうが」、「十時間以上であれば疲れが取れる。しっかりと寝なさい」っていうふうに決まると思えます。でも、じゃあ、僕は何時間寝れば、この物を作るとか、皆さんとこうしてお話をするわくわくよりも、「わあ、寝て良かった」って思えるのが、どうしてもいまだに答えが出せない。しかも、多分皆さんに聞いても、「いやいや人間三時間以上寝ましようよ」

「いやいや七時間寝とかなきゃ駄目だよ、倒れちゃうよ」っていうふうに答えがばらばらになること。「あいうえお」って皆さんに今書いてもらったら、字の形はどうあれ、どう見ても皆さん同じ「あいうえお」書けますよね。なので、僕、「あいうえお」の言葉を覚えてこれだけ話せるようになりました。数字もそうです。「一、二、三」っていう形で、でも寝ることとか食べることとって、何でこんなにみんな答えが共通しないんでしょう。それぞれのルールになるんでしょう。人間で生きるっていうことの不思議なポイントはそこです。それによって、いまだに日夜悩まされながら、場所場所によって、今日も帰る間に、「先生、今日はもうお話で疲れたでしょうか、夜十時までには寝ましようね」って言われたら、何か十時に寝てみたい気になるかもしれない。毎日そんな感じで、人の言われたことで生きています。食べることとか寝ることは、いまだにはつきり答えが出せず三十年間悩んでいます。その中で生きていくっていう。今、僕、既に今日のこと記憶喪失になったことに今さらながら気がつきました。今日皆さんに、僕の話聞きながらその当時の僕の写真を見てもらおうと思っていたのに、全然写真を映さずとこの一番の講演会のタイトルの画面を映したまんまでしたよね。もう三十分以上前にみんなに見てもらったつもりでした。むしろ始まる前に見てもらったつもりでした。

二番の写真お願いします。これ、一九七〇年ね、僕が生まれた頃です。こんな感じで、そう、これ今の形で見ても、いまだに僕この頃の記憶全くないんですね。赤ちゃんだった頃の優介、生まれた頃の優介、昔の僕だった。赤ちゃんだった頃の優介、「赤ちゃんだった頃の」っていうのは

何だろう。名字みたいな感じなんです。子どもの頃の優介。「子どもの頃」、でも僕、坪倉優介じゃないですか。「優介」の前の「坪倉」は名字なのに、「赤ちゃんだった頃の」優介、「友達だった頃の」優介、「子どもだった頃の」優介、いろんな形で「優介」が万能に使われるルールがすごく難しい。皆さん当たり前のようになっていますよね。記憶なくした人、ちょっとなかなか覚えてない子どもたち、大人がその辺の当たり前になつてること、すごく不思議で仕方がないと思うんですね。「そんなの当たり前じゃない」って子どもに言い聞かせてる大人はたくさんいると思うんですが、「何で当たり前って大人は言うんだろう？」って、実は子どもはすごく不思議で仕方がない。それを聞き返せれない、誰に聞いたらいいか分からないで悩んでいる子どもはたくさんいます。なので、今日出会った皆さんは、いつかそんなふうにも子どもに聞かれたときは、その子どもの視線に合わせて答えてやってください。

三番の写真お願いします。やった、写真が生かされていますね。赤ちゃんだった頃の優介でつて、この写真、多分日にちが変わったんでしょうね。着るものとかちよつと顔の雰囲気違いますよね。記憶がないとき、母が、「何とかしてこの子を今までの優介に戻してやりたい」って。だって記憶喪失になった家族なんて、母にしても生まれて始めてだったもんですから、どうやったら記憶が戻るのか分からずに悩んでいました。その結果、今までやってきたことをいろいろ挑戦させてくれていました。好きだった場所に連れていく。好きだった食べ物を与える。そのときにピンときて記憶が戻るかも。答えない記憶喪失の治療の仕方、家族ができる方法としてはそれしかな



かったんですね。なので、母は過去にあったことをアルバムを通しながら一つ一つ毎日ゆっくり説明してくれました。でも、さっき言ったように、「坪倉優介」じゃなく「赤ちゃんだった頃の優介」、これも「赤ちゃんだった頃の優介」、こっちは「幼稚園だった頃の優介」だけど、こっちは「赤ちゃんだった頃の優介」っていう、音楽のようにその「赤ちゃんだった」、幼稚園だった」って変わる「優介」が、もう外国の音楽を聞いているように僕は不思議で不思議で仕方がなくて、しかも、だってこんなちっけな写真が、しかもこんな薄っぺらいアルバムに入っているものが、何で僕と同じにされなきゃいけないのかって不思議に思いながら写真を見ていました。

四番の写真お願いします。さらにその頃のお父さん。「お父さん」というものまで出てきたぞ。でも、昨日まで見ていたお父さんと違う。ここにも「お父さん」というものがある。「じゃあ、僕の目の前にいるのは優介？お父さん？」って聞いたたら、母は、「いやいや、お母さんはお母さんじゃない」。お母さんはお母さん。音的に不思議じゃないですか。お母さんはお母さん。「じゃあ、これは優介の優介？」いや、「これはお父さんと優介」。その区別で分ける音、だってそれが文字じゃなくて耳に入ってくる音じゃないですか。今も皆さんで聞いている「お父さん」、「優介」、「お母さん」、この言葉の音の切替え、しかも多分日本人である皆さんは、昔の人が考えた「あいうえお」から「わをん」の五十そこいらある文字の並べ替えだけで、当たり前のように聞き分けている。それが当然のようになっている。その音の切り分けで僕が今から発する音

を聞いた瞬間、皆さん同じものが想像できるんですよ。例えば言ってみますよ。犬。浮かびましたか。車。これいつからなんでしようね。生まれた赤ちゃんが子どものときにできるものではないものあると思うんですよ。大人、これだけの年月を生きたから当たり前なんて、この皆さんの、「ああ、言われてみれば」っていうことが、今突然頭を打ってしまったら、車に轢かれてしまったら、いやいや、もつと皆さんにとって、あまりにも現実味でありそうな見え隠れしてる部分で、ちよつと言うのも怖い脳梗塞とかあった瞬間に、脳の形が変わった瞬間に、「ああ、言ってたのはこのことか」って、今現在も体験してる人がたくさんある上に、皆さんの中にも起こり得ることなので、身の回りに生かしてください。本当こつこつだったアルバム、写真一枚でも、しかも、それを忘れることなく、いつか見たらいいやではなく、本当、過去にあったことも昨日あったことも、すぐ忘れることなく大切に、頭に、自分の中でどんなことがあっても忘れることがないだろうっていうぐらいしつかりと、家でほうつとして、ああ、やることないな、どうだろうって脳を休めているのはすぐもつたないぐらい、すぐく人生の中で心臓だけではなく、脳もすぐく生きることに意味するものと、事故をした僕は強く感じています。

次の写真お願いします。そのお母さんです。僕ずっと写真を見ていきながら、「これが赤ちゃんだった頃の優介、これが幼稚園だった頃の優介」、アルバム、すごく不思議で見えました。「これが赤ちゃんだった頃の優介」を、「赤ちゃんだった頃の」、よく分からなかったのに、「優介とお母さん」、「えっ、『お母さん』って隣にいる人を『お母さん』って呼ぶんじゃない

かったのか」って、すごく僕、「お母さん」っていう言葉を覚えてたてはやはやですごく新鮮。しかも、「これは人間、あれも人間」、「えっ、人間じゃなくてあれは動物?」、「えっ、動物なのにあれは犬でこれは猫?」、すごく混乱している中で、「お母さん」。えっ、僕にすごく毎日優しくしてくれる人が、それは「お母さん」だから。その意味はよく分からなかったけど、まだ区別は分からなかったけど、すごく「お母さん」っていう単語って安心できるな。いつもこうして真剣に僕に分からないことを教えてくれる「お母さん」っていうのを見つければよかったのか。そのときに、今日の皆さんみたいにふっと目が合ったときに、何か、お母さんは、もう言葉にせずとも言わずとも、目と目が合った瞬間に、わっ、何かすごく安心できる、この人になら何でも聞けるっていうふうに思える存在だったんですね。心がここに表れました。「これもお母さん」

「えっ、『お母さん』って一体何人いるんだろう。でも、この人も、何かこの表情、見ていたら安心できるな」って思いながら、「何が違うんだろう」、間違い探しののように、「ここにいるのはお母さん。あつ、でも、こっちもお母さん。お母さん。お母さん」って、何度もそのときのアルバムとお母さんを見比べていた瞬間でした。ふわあつと、だんだん、その「お母さん」のって目線のところから、何となく常に自分のそばで、今までアルバムを見ていたようなその写真で、常に自分のそばにいる存在。しかも、安心できる存在というところと、「お母さん」っていう耳から入ってきた言葉が重なったんですね。その瞬間、自然と、今までは、何となくそれにこぎ着けて合わせていた英語の単語、習ったように、鉛筆を「ペン」って言わなきゃいけないんだ、

「ペンシル」って言わなきゃいけないんだっていうふうには、何か考えながら言うのではなく、自然と響くように「お母さん」って口にした瞬間、「あっ、何かすごく幸せな気がする」。「えっ、何？」って聞き返した母に対して、もう一度「お母さん」、「そうだよ」、あっ、答えが返ってきた瞬間にもうめちゃくちゃ幸せで、この人は僕のお母さんって確信したんですね。これ、皆さんも経験したことありませんか。覚えはないと思うんですが、赤ちゃんとして生まれて、「ママ、ママ」って何となく口まねしたときから、ふっと「この人は自分のお母さん」。どんなに町なかでいようが、遊園地で迷子になろうが、「お母さん、お母さん」って。どの人がばって声をかけてもお母さんじゃない。「お母さんどこ？お母さん」って探しながら見つけたとき、「うわあ、お母さん」ってすごく安心して涙あふれて飛びつく子ども。それだけの絶対的な絆が確信される瞬間を、僕、十八歳になってももう一度感じる。それによって、忘れたはずの「お母さん」っていう存在の在り方を確信できる幸せに気づけたこと。事故して後悔ではなく、事故していつまでも悩むのではなく、事故をしたおかげで、当たり前のようなご飯が、当たり前前の笑顔が、そして、「もう何やねん、おかん、もうほっとつてくれよ」っていうような、すごく粗悪に扱っていた母親、でも、それでも常にそばにいてくれた「お母さん」っていう意味と大切さをもう一度確信できた瞬間が、この写真でした。

次の写真お願いします。そんな中でっていうので、これ、シャッター押してくれたの、お父さんですかね、お母さんですかね。自分で言うのもなんですが、めちゃくちゃかわいい笑顔じゃな

いですか。自分の子どもだったら、もう、めちゃくちゃなで回してかわいがってしまう。こんな笑顔を作れるのも、ほかの他人だったら怖がってしまうのに、お父さんお母さんにだけはもう絶対的な安心で、子どもが向けられる笑顔ですよ。このとき思いました。僕、いろんなものを忘れていた中で、人間としての感情、「『うれしい』ってどう思うんだろう？」、「『悲しい』ってどう思うんだろう？」、「泣く」とか「笑う」が、僕、判断がなかなか難しいんですね。でも、こういう笑顔で常ににこにこしていたいなって思うきっかけが、この写真にありました。写真で笑顔に戻すこともできるんです。そういった部分で、自分の最高の笑顔のアルバムを、皆さん、きれいにまとめておいてください。

次の写真お願いします。さらに、そこから出ていったら、だんだんもう今の僕になるきっかけ、こういうたところですかね。もう、母親がいろんなことを、わくわくするようなことをさせてくれてたんでしょね。これ、花壇に水やりをしてるんでしょか。そこにいて虫を見つけてくなのか。そこに伸びてきた葉っぱとか花にぱつとやる。もういろんなわくわくするものがある場所に連れ回してくれる。でも、そういったところから、子どもとか、今からでも、皆さんでもそうです。わくわくすること。楽しむこと。人がどう思ってるとか、人が考えてるって、自分の気持ちを押し殺して、人の気持ち、人の考えよりも、まず、自分が楽しくわくわくするものを見つめる。こうすることで毎日充実できて。だって、生きてるんですもん。その部分で、充実できるものを見つめるのはどうでしょう。ふっとこの話を聞いて、「ああ、今日、いろいろな発見

あつたな」って思いながら一息飲むコーヒー。ちょっと違った味つけになって、「あつ、何か、今日のコーヒーおいしい」。ただ単に、もう作業のように飲んでしまうにはもったいない。何てことない、一〇〇円、二〇〇円、そこいらのコーヒーかもしれません。それを何となく流し込んで体の中に入れるだけなんて、人生の中でそんな重要な時間を使うより、「うわ、何か今日のコーヒー、すごくおいしいぞ。いつものラベルのコーヒーやのにな。今日」っていうふうに、ただ単に皆さんの過ごしているもの一つ一つを、自分の気持ち一つで充実できる。生きてることですから、思うことは勝手ですから、そうやって皆さんの今ある時間も充実できることがいっぱいなのに、ちょっとぜいたくに流してゐる時間がないでしょうか。そういう部分にも、記憶をなくすと、僕すごく意識できて、もう、そう思いながらも今もすごくわくわくしています。

さらに、その次の写真お願いします。さっき言った三人兄弟です。こんな感じでね、妹、弟と、兄弟で。ねえ、もう本当にお父さんお母さんって大変だなんて。僕ね、五十にもなりながら、まだ結婚とかしたことがないので、さらに子どもの大変さ、こんな、もう想像もし切れない。いきなり何をやらかすか分からない子どもを三人も四人も持っているお父さんお母さん、もうめっちゃくちゃ大変。何かぶわあっと走り回りながら、大人でもなかなか追いつけないような小刻みな動きで走り回る子どもを捕まえて相手するっていう、すごく大変な部分。そんな子どもを三人も持つお父さんお母さんに迷惑をかけたのに、せっかく育ててもらいながら交通事故に遭ってしまって、心配、悲しみも与えてしまった。もう今は毎日お母さんに笑ってもらいたくて、お母さんを楽し

ませるには、自分が充実する、生き生きしていることが、お母さんを一番何か笑顔にしてくれるんですね。「お土産」って言って、めちゃくちゃおいしいと思ったケーキとか、何かどこぞで聞くブランドの小物を渡すよりも、「もうめっちゃくちゃ、今日、染めをしてたらこんな面白い色に染まってん」って言ったときに、「うわあ、すごい、きれいだな」って言うってくれる母さんの笑顔が一番好きです。なので毎日、今日も充実するような時間、充実できて人を幸せにできるなんて、自分が笑顔になって周りの人を笑顔にできるなんて、もうそれだけで皆さんすごく幸せだと思うんですね。なので、今日も、僕の話も笑顔で聞いてください。

次の写真お願いします。これ、幼稚園のときです。僕には全く身に覚えがありません。隣にいるのが、今友達としていいのか、実はもう、何十年も会ってない友達なのか、名前も何ていうのか。むしろこれ、こんなところに行っていたんだって、想像はできないんですが、何かめちゃくちゃ楽しそうですよ。 「あつ、食べる時も楽しむってこんな感じなんだな」、アルバムを通して思いました。でも、何でしょう、僕の前の歯。あれ、ノリついてるんじゃないですよ。あれ、抜けてるんですかね。ぱってお茶とか飲んだら、前からびゅうってこう出るような。あつ、僕も経験しているんだ。しかも、前歯折るぐらいですからね。すぐくやんちゃだったんだらうなと、このとき考えています。それを知らない、ちよつとその部分があったいなくも感じますが、いまだに五十になっても、幼稚園のときの自分の写真を見ると新鮮に感じれるのは、記憶をなくしての幸せかなと開き直っています。

次の写真をお願いします。ふっと写真の雰囲気、感じ変わりましたよね。ぐっと飛びます。そこからさっきまでのね、ずっと僕がどんどん成長して、中学、高校へと、そうして僕育っていきました。大学行って染めていきました。大学に行って、さっきまで育っていた僕が、交通事故という自分の人生の中で予測していなかった運命に出会いました。皆さんの中でも、できたらね、宝くじに当たるとか思いがけないことであって、驚きの幸せばかりが舞い込めばと思うかもしれないが、気をつけてください。自分の体にもしものあること。また、安全だと思っていた場所に突然何かが舞い込んできて、大きなけがをするっていうのは、もう本当、身近な中でもたくさんあり過ぎてびっくりしています。

皆さんは、信号待ちをするとき、どの辺に立たれていますかね。大阪の人って、特に僕、先ほど話したとおり、仕事場、難波にあります。少しこ急いでるんですかね、せっかちな人がいてます。大阪、びっくりです。何か僕、記憶をなくした段階で、いろいろ覚えた中で、「あのびかびかするもの何?」「信号」。信号ってすごいですね。何もしゃべっていないのに、何も教えていないのに、青になったら一斉に人が動く。赤になったらさっちり人が止まる。僕、作品の展示会で全国を回っています。どこに行っても、北海道に行っても、沖縄、ちよっと信号はなかったけど、九州に行っても、ちゃんとそのルールで、青なら渡れ、黄色なら注意、赤なら止まれ。記憶をなくして間もなく、それも習いました。僕、信号とか全く記憶からなかったもので、学校に行く途中、電車の乗り方一つでも、道の歩き方一つでも覚えなければいけませんでした。みんなに合



わけて動いてました。ところが大阪だったので、大阪のルールどうでしょう。青なら渡れ、黄色なら渡れ、赤なら注意して渡れ。そんなふうなことを言われるぐらい、何だろう、そのとき、赤信号を渡る人がいたんですね。記憶のない僕は、「えっ、今も渡らなきゃいけないんだ」と思っ  
て渡ろうとした瞬間でした。「おい、待てよ」って。「おまえどこ見てんねん。信号赤だろ」。「どこを見てるねん。信号赤だろ」。こんなに町なかなのに、「えっ、みんなどっか見るところ決まっているの?」「信号赤だろう、信号赤」。「赤って色覚えただけど、あっちこっちに赤があるぞ。何を信号っていうんだろう?」。記憶がないのでね、そんなところにびっくりしました。後で聞いたら、ぴかぴか光るもの、それが赤なんだっていうのはずっと後に覚えました。なので、信号もいまだに意識して見えています。ですが、難波で、こう、すごく渡っていく人が。それで、何だろう、二、三か月前でした。ふっと渡っていったところで、車と、轢かれはしませんでしたが接触して、「危ないだろ」って言われたその人は、もう一目散に走り去っていきました。そんなことで済まされるのか、ルールとして。僕はそれを不思議で見えました。でも、そんなことをして、たまたま接触だけで済みましたが、轢かれていたら、その人はどうなっていたんでしよう。そのとき、いきなり足を失っていたかもしれない。命を失っていたかもしれない。そこまでの代償を。信号って、もう皆さんの身の回りにも、しかも、このホールに行く前にも、まずね、信号、どんとありました。結構長めの信号でした。でも、皆さんと会うためにね、慌てず急がずしつかり青になるのを待ちました。でも、今日も、その待ち方一つでも、皆さんいろいろ個性が

あることがすごく不思議でした。何のために信号のあの周辺に柵があるんでしょう。ふって行きながら、あのポール、信号とか看板の立ってるその位置が、なぜあの場所じゃないといけないんでしょう。

僕ふだん着物を作る染色職人です。その着物を作るために、無限にある色の中でその作品を作るための色を選びます。その色に染める理由があります、ルールがあります。よりみんなが着て幸せだな、きれいだな、楽しいな。色の在り方で表れる気持ち。着る人によって違っていているふうに、色の力を感じています。なので、その信号を作るために、そこに行つて、僕は、その信号周辺のガードを作ること、ガードを道路に置くことも、人生の中で多分一生ありません。でも、人生の中で、それを道路に作ろうとする人生を選んだ人が、この世の中にいます。大抵の人、もう全くその作品に、ガードやポールに興味も持たず通過していつてると思ってますね。今、その信号にどんなガードがあつて、どんなポールがあつて、多分、想像できない。できる人なんて、多分いないと思うんですね。それぐらい素通りです。こんなにもあつちこつちに、至るところにいろんな形、いろんな置き方、いろんなものがあるのに、何の関心も持たずに置かれていくもの。だつたら、邪魔なんでどけてしまえばいいじゃないですか。でも、ふつと車が曲がり切れず、突つ込む。その部分で、しかも、人がいそうなところにちゃんと考えられてガードは置かれていんだなど。邪魔なところにまで、あちこちにガードを置いていくわけじゃないんだな。そのときにどおんと突つ込んで入つても、このポールがふつと曲がるだけで、誰かの命を守つて

くれる位置にポールはある。なので、信号を渡る前、ガードや、誰よりも先についていうことで道路に片足でも飛び出すより、ちょっと一歩、一息置いて、ガードの手前、ちょっと自分を守ってくれるって位置に立てる、すごい安全地帯がたくさんあるっていうのを、今日話を聞いて、信号をちょっと待つ機会があったら、ちょっと左右見てください。実はそうやって物をつくる、皆さんと同じ人間なのに、そういったものを考えて、江戸時代の頃には、明治の頃にはなかったようなものを、常に信号とかガードとかが進化してこれからも作られていくんだ。十年後、道路の形ってどうなっているんだろう。人間が道路一つにも作り上げていく。皆さんの中にも、毎日料理を作るとか、着る服を替えるとか、いろんなものを年老いて変化させていくことを、人生の中で何となくやっていく。でも、客観的に興味をもって見ていったら、すごく面白いことをたくさんされてると思うんですね。

そういった中で、僕、事故をして、いろんな言葉を覚えながら、みんなが言ってること、鉛筆一つ分からない、色を塗ることが分からない僕が、大学で学ぶこと、いろんなもので発見すること、楽しかったです。でも、ここまでしゃべれるのも、こうして動けることも、僕の中で軸になったのは色。色だけです。いまだに人生を進んでいく、生きていく中での僕の軸は、色だけです。大学でいろいろと興味を持った中で、日本の色、和の色、こんなふうにあるのか。世界の中で、世界の空間で、日本とはまた違った色があるんだ。それをじかに見てみたいということ、大学卒業した最後に、よし、外国の色を見に行こうっていうことで旅に行きました。いろんな差

別の中で、同じ人間の中で、今ね、もう男性、女性、男性らしい女性、女性らしい男性、女性らしい女性、いろんな形、思い方があって、皆さんもテレビやニュースを見ながら感じているところは多くあると思います。特にNHKなんかはね。すごく男性っぽい人なのに女性らしいような格好をした人とか、外国なのにとかっていう、もういろんな形の人間を無限に出していると思います。何となく人間の中で比べてしまふ、差を置くっていう部分の思い方、僕は全くその基本がないので、不思議な課題の一つでした。その中で、見たこともないこの女の子が、この写真、ドイツのケルンという町の教会をじっと見ていました。その周りで、いろんな白い肌の人、僕のようなアジアの人、たくさんの方がいろんな形でその教会のずっと上にある鐘の鳴る瞬間をみんなが共通して見ていました。その耳で、僕とは違うどんな音を聞いているんだらう。青い目、茶色い目、僕みたいな黒い目、それによって映り感じている色は違うんだらうか。そんな中で、ずっとこの子の目を通す中に深い色を感じたものですが、黙ってますが、ふっと脇にカメラを構えて静かにシャッターを押した一枚でした。

次の写真お願いします。そう、そんな横を、鐘を鳴るところを、軽快に、何でしょうこれ、ローラースケート、ローラースルーっていうんですかね。さあっと行きながら、犬の散歩をさせている。はい、僕、大学に行って、先ほど話したとおり、まだ、今ほどしゃべれない。言葉も分からない。なのに外国ですよ。そんなん英語もしゃべれないし、ここドイツでしたがドイツ語もしゃべれない。なので、一切しゃべれない。言葉でいかにないのに、何だらう、先ほどのように女

の子から深い色を感じることができた。ここからでって、すごく軽快に楽しい音楽を感じたんですね。いろんなもののその瞬間にっていうことで、僕の中でどんどん、言葉なんて要らず、人の気を遣うとか、それに答えを求めめるのではなくて、心に入ってくる色、それをどんどん自分で取り入れたいと思う数々の瞬間でした。

次の写真お願いします。人だけではなく、その人の瞳も呼吸もない、この人が作った石像、その中なのに、一つ一つの目を見てください。表情を見てください。人間のうれしい、楽しいとかっていう、いろんな動きのある表情だけじゃなく、この一つ一つの像に、皆さん、「あつ、この像はこんなふうに見えるのかな」、「こんな思いで」っていうふうには、皆さん、それぞれの表情で、怒っているのか、笑っているのか、実は悲しんでいるのか、想像を湧かせますよね。言葉は要りませんよね。色だけで、形だけで、「ああ、芸術って面白い」。その説明なんか要らない。言葉にしなくともぐつと心を感じてもらい、それは答えなんて要らない。自分の中で感じたものをぐつと伝える。そう、生きる、止まる、そんなものは関係なく、その感じさせるもの、目なのか色なのか、それをぐつと思う作品を作りたいって思う瞬間でした。

次の写真お願いします。そんな中、これ、ドイツのライン川、こんなところに行きました。何か困ったら、言葉が僕しゃべれないので、そういったときは、ここで絵を描きました。もう夕方終わったら、ドイツの人たちはライン川沿いでビールを飲むので、僕を見つけた人は、「へい、何やってんだい、そんなところで」、「おつ、どんな絵を描いてんだ」って話しかけてきてくれ

た気がします。先ほど話したとおり、僕、英語もドイツ語も分からないじゃないですか。何とかですが、先ほどの石像にあったとおり、表情です。怒ってもいけない、悲しんでもいけない、嫌がってもいけない、何かすごくわくわく、好奇心のあるような目で僕を見ているので、僕の都合のいいように、「ちよつとこんなふうには絵を描いたんだ。じゃあ、君の横で絵を描くから何か食べさせてよ」って日本語でしゃべりました。しかも、ジェスチャーで、「何か食べたい、何か食べたい、何か食べたい、描くから」。「オーケー、来いよ」って言ってくれる人がどこかにいたら行って行きました。ビールを出されたら、自然とみんな、「おお、乾杯」って。もう立ち上がって、「イエイ、乾杯」ってやりました。最初、「乾杯」って日本語で言りましたが、みんな言った瞬間に不思議そうな目で、「はあ？」って見るんですね。「ううん、やっぱり心で通じ合っても言葉は邪魔かあ」。邪魔になりました。なので、ちよつと僕、知恵を振り絞って、「ありがとう」、英語を考えました、「サンキュー」。二、三人が「サンキュー」。ドイツは、「サンキュー」が通じない。英語じゃないんだ。何となくでっていうので、唯一、そのドイツ語での「サンキュー」に当たる「ダンケ」、「サンキューベリーマツチ」、「ダンケシェーン」。でも、「ありがとうございます」、そんな丁寧要らない。なので、「ありがとう」っていう感じで「ダンケ」。僕、結果、放浪で、手元に全財産五万円しかなかったんですね。でも、三か月間ほど、その五万円だけ持って、みんなに食べさせてもらって。それでいったらもう余分な言葉は要りませんでした。「ありがとう」だけです。もう全身全霊、もう本当に感謝の気持ちで「ダン

ケ」、「ダンケ」、「ダンケ」。それだけで三か月間食いつないでいくことができました。

「生きる」っていう部分で、前向きに生きることで、本当、皆さんでも、「ええ、そんな、もう坪倉さんだからできる」ではなく、やっぱり、生きている部分で、いろんな部分で、皆さん、ぜひ冒険していただきたいと思います。「いやいや、こんな年で」って、そんなブレイキかけるルール勝手に決めないでください。「生きる」とはそういうことです。ぼうっと寝ていても、一分一秒、もう今こうして話していても、今日話を聞いていただいても、どんな時間は過ぎていつちやいます。どんどん自分の人生が追い詰められていっています。だったら面白いこと、好きなこと、みんなदैいって笑い話にできるようなことが、今すぐにでも、できたら、もう皆さんと一斉に関西空港に行つて、そのまんまドイツに行きたいぐらいです。今、この話を聞いて、こうやって聞いて、今僕と一緒にドイツへ行つたら、「うわ、こんなに面白いんだ」。だからもう、みんな一斉にビールで乾杯しましょうよ。もう、現地の人巻き込んで乾杯しましょうよ。しかも、言っておきました。みんなदैって言つたら、みんな一斉に言ってくれると思うんですね、「ダンケ」って。そういう部分で、今日こうして来ていただいた、会つていただいてまた話をするこゝとで、「ダンケ」という、ちよつとしたささやかな楽しみも含めて、自分たちが一歩進む、そうした形によつてささやかな楽しみができたんだなと思つていただければ幸いです。

はい、今日はこういった形で一時間半お話しさせていただきましたが、「生きる」というテーマ、こういった形にさせていただきますと思います。ありがとうございました。(拍手)

○司会 坪倉さん、ありがとうございます。

本日は、「記憶を失うとどうなるのか?」、それを乗り越えて現在に至るまでには、坪倉さんご自身にも、ご家族にも、大きなご苦労があつて、だけど、大きな愛情に支えられて乗り越えてこられたことをお聞きできたかと思ひます。改めまして、当事者の立場からお話しただけましたことに感謝いたします。

本日は、少し時間がございますので、これから皆さんのご質問をお受けしたいと思います。質問のある方は挙手をお願いいたします。

○坪倉 優介 はい、記憶のなくなる部分、色に関心を持つ部分でも、遠慮なく質問してください。

○質問者 A どうもありがとうございました。

ちょっと、大変貴重なというのか、体験を聞かせていただきまして、何がただかよく分からないまま今質問しちゃいます。申し訳ないですけども、訳分からんかったら、また、「何言うとなねん」と言うてもらったらいと思ふんですけども。

一度、リセットされてしまつて、怒ることも、みんなが分からないわけですよ。おっしゃつたように、「ご飯」が何か、「朝」がつけば「朝ご飯」だとか、それが何か認識ができないとか。そういう感覚っていうのは、誰か教えてくれたんですか。教わるんですか。自分で勉強するっていうのか、身につけていくものなんでしょうか。今もお話聞いてましたら、すごく、もう普通の



人よりもいろんな知識がおありで、いろんな勉強をされてるんやろなっていうふうに思われるぐらいなんですけども。これは、自分が進んで身につけようと思えたことなのかっていうことが、ちよつと不思議でならないんですよ。何にも分らない人は、赤ちゃんのまんまで、ああ、そっか、赤ちゃんだったって一つ一つ覚えていくのか。そんな感覚でいいのかしら。

○坪倉 優介 ああ、なるほど。ありがとうございます。

今の質問の答えですが、記憶をなくす、言葉を話せない。もう本当に、僕一番最初は赤ちゃんのような状態です。だから、自分で考えることもできないし、自分で思う、動くこともできない。そこで、してくれたのは、自分の周りの人です。特に一生懸命してくれたのは家族。もう特別一生懸命してくれたのは母親です。それによって、赤ちゃんのように一から物事を教えてくれる。そのときに、僕が起こした状態は、聞くこと。「なあに？」、「どうして？」っていう言葉がおのずといつ頃からか浮かびました。今の言われた状態にいくのは、多分生まれて一歳から三歳ぐらい。もう、もともと一番最初は、もう赤ちゃんにも届かない植物人間のような状態なので、僕、病院から出て、何となく家の中に運ばれた時点では、ずっと座ったまんま、ぼおつとして動けない。どうやったら指が動くのか、どうやったら立ち上がれるのかが分からない。ふってみんながやってるふうについて思うのに、体が動かせない。みんながふだん当たり前のようにやってることです。全部脳です。脳で、「ようし右手動け。人差し指動け」っていうように考えなくても、多分皆さん動けてますよね。すごい人なんて、今ここでもこうやって話を聞きながら書いてます

よね。すぐくないですか。ええ、私の脳って天才、そんなことができるんだ。いやいや、もうそんなん、東大も行けないし、大したことないのよっていうレベルじゃなくても、もう人間として生きています。すごいことをできています。生物なんだって、もう僕はそうやって思います。それができなくなってしまうたら、本当動けません。その動けない状態からずっと母が言って、「これは書くもの」「書く」って何？」「書く」ってね、紙とかに、こうやって字を書くの」「字」って何？」「字」はね、『あ、い、う、え、お』って、こうやって文字に。「字」だの「文字」だの「書く」だの、聞けば聞くほどどんどん音が変わって、不思議とその伝わるそれを、「字」、「平仮名」、「漢字」。今ふっと想像して。「じゃあ、その『字』は・・・」って、いろいろと想像する。その「字」の中で、「文字」、「漢字」、「平仮名」。「えっ、『ひらじ』って言わへんで『平仮名』なのに、何でみんなこれを『文字』って思えるんでしょう。こんなところまで覚えなきゃいけない」って、もう限りなく、「えっ、それ何？何でそれ言うの？」って。こうやったら、「ねえねえ、これ何？」「ペットボトル。ペットボトルっていうの」、「これ何？」「時計」。「これとこれ、何で言い方変わるの？」何ででしょう。「ペットボトルはペットボトル、時計は時計じゃない」。これで大人は通じるかもしれないけど、子どもとしては、「何で『ペットボトル』を『ペット』、こつちを何で『ペットボトル』って言わないの？」そういった部分を母親はずっと付き合ってくれました。それを何とかでっていうふうに答えてくれましたが、だんだん大変なことが起きました。

僕、夢中になつたら眠たくなりませんよね。夜中でも、「ねえねえ、お母さん」って。寝てるから動かなくなってるんですね。さっきまでばあって動いてたのが、もう本当、この状態で動かない。寝てるって知らないから、「ねえねえ母さん、母さん」って、もう止まってしまった、電池が切れたんじゃないかって、子どもとしては、もう動かなくなったおもちやのように焦りますよね。「母さん、母さん」って。はっと、「何？」あつ、動いた。びっくりする。「だから、これ何て言うの？」「ええ？」って、ある日お母さんに大きなため息つかれてしまいました。僕としては、もうすごい大砲を打たれたような、その音がショックで、ええ、何か自分としては悪いことをしたのかな、でも、どうしても、これ何か教えてほしい、でないと、先に進めない。じゃあっていうので、お母さん、ある日、「母さんね、できるだけ頑張る。聞かれたことを教えてあげるけど、これ使って」って渡されたのが辞書でした。さすがに、自分も出かけてるときとか、寝ているときに、答えれないときに、それでもどうにかしたいっていうので、僕に辞書を渡してくれました。辞書、すごいですね。音を聞いたら、それで言った絶対的な部分で、平仮名、文字で書かれているので、「うわ、そういうことなんだ」っていったら、同時に、それを表す漢字が覚えられる。さらに、その漢字の下に意味がある。さらに、平仮名でその言い方の発音、「こ、た、え、る」、「答える」、あつ、漢字がここでつて、「答」から「える」で分けれる。「うわ、すごい」、いろんなものが詰まってる。しかもあれ、何でしょう。「あ」から「ん」まで、もう数え切れないほどの言葉がすごい詰まってませんか。「人間って、こんなものを覚えて、それで

しゃべれるようになるんだ。しかも、人間って、こんなに数多くの言葉を覚えなきゃいけないんだ。今すごいびっくりしています。そこまで覚えなくても、むしろ、あんなに、辞書の中のほとんどを使わなくてもしゃべれるもんなんですね。そのとき知らなかったし、そのとき誰も教えてくれなかったし、そこまで母さん教えてくれなかったの、はい、ここまでしゃべれるようになったのは、「あ」から「ん」まで僕は読むもんだと思っていたので、五回、三十代までに読み返しました。できるだけそこに書いてある文字とか漢字を覚えるようになっていって見ました。そこまですごいだったので、いまだにちよつと、その辞書に書いてあったような説明っぽいしゃべり方になるのはそのせいかなとは思っています。ですが、なくした言葉で、そこまですごいしゃべり方もうそれだけではなくなって、出会った人、友達とかにも、「これ何て言うんですか?」「それ切符っていうの」「それノートっていうの」。丁寧に教えてくれる人はたくさんいました。いろんなことで三十年間吸収する部分ですが、もう本当、最初は見境なく、いろんな辞書や物に広げていって、覚えなければ、早く戻らなければということで必死でした。

究極だったのは、大学の図書館。学校の先生にもすぐく、黒板に授業で文字を書かれるんですね。でも僕、音で文字、言葉覚えてるんで、漢字がいまだに難しい。「はし」、何でしょ? 想像されたのを、全部が同じじゃないと思って。一番、多分、この中で多いのは、川にかける橋。食べるのは? この辺って言われてみれば、橋、箸、端。何でこれで想像できて通じるのか、いまだによく分からない。漢字にすると分かるけれども、音で聞くと、ほら、川にある橋とか、

何か前についたもので想像するんですよ。でも、そんなものを知らなかった僕にとつて、川と言われようが、ご飯のときに使うって言われようが、全部が音に入つてなので、難しかったです。なので、いまだに言つて会話する、なかなか言葉でつていうのは、漢字は想像できないんですが。町なか歩いてて、看板っていうんですかね、そこに書かれているもので、いまだに見たこともないものを見つけたらノートに書いて、宝物の辞書で調べて、漢字練習をしています。五十過ぎから漢字練習している人、この中で何人いるでしょう。意外と、子どもにやれやれ、もうその部分で書け書け、そんなのできるからつて言つていた大人が、もうすっかり忘れて書けなくなっているのに、開き直つて書いてない人がたくさんいるんだなつて思いました。でも、一日一個、この中でふつと思つたら、気になつた漢字を書いてください。すぐくないですか、一日一個。一年やつたら三六五個書けちゃうので、十年たつたら三千文字以上、新たに今の自分よりも漢字が増えるのに、たつた一日の一字漢字を練習する。その中でちよつと忘れても今よりも進化するのに、ちよつとだけ時間もつのにつていけたら、文字を覚えること、開く部分には、しかも、今なお意識しているのはそういう部分です。記憶をなくした人間ですら、なかなか皆さんよりも文字とか言葉を失つた我々ですらやつていうことです。皆さんは、それよりもずっと上のレベルに、いることに満足をしているかもしれないんですが、「それをただ単に覚えたら全然使い道ないし、書くことないもん」つてなるとは思うんですが、意味のある文字や漢字を見つけることを、「ああ、漢字つて楽しいかも」つていうふうに、ちよつと思ひ方、考え方を変えるだけで、今日のこと

の中でも、漢字が楽しくなる人が増えるんじゃないかと思えます。

「いやいや、でも、そんなんで」って、大半、皆さん思ってるかもしれませんが、実際には、以前こんな感じで、あれは愛知県ですかね、そこに来られた方が挑戦しました。挑戦した理由はお母さんでした。僕はそのとき、愛知県のほうで作品の展示会をしました。「全く作品とは関係ないかもしれないけれども、着物なんて全く知らないけれど、実は、私の娘が先日事故に遭って、坪倉さんと同じように記憶がなくなった。全く。それで怖がって」。だから、僕のその赤ちゃんの頃ですよ。形も動きも何か分からなくって、言われている言葉も理解できなくって、びくびくする状態っていうのがすぐ分かりました。「娘がその状態になっていて、自分ではもう怖くて前に進めない。いろんな病院に連れて行って、いろんな薬を与えてやっていくけれども、どんどん娘が私と目を合わさなくなっていく。もうどうしたらいいか分からないので、相談に来ました。もしかしたら本人に何かしてくれるんじゃないかなと思って娘を連れてきました」「なるほど」。なので、最初に聞きました。「じゃあ、多くは聞かないから、ゆっくり話すから聞いてね」って。「今一番好きなものは何？」そしたら、ずっと目をそらして、ずっとうむき加減になりました。「わかった。自分で答えを考えて聞けない、また答えるのが怖いかもしれないから、そっとお母さんに伝えてもいい。そのまま話したくなって、僕に伝えてもいい。もう気持ち動いたときで構わないから。二時間でも三時間でもお母さんと話して待っているから、自分が好きなこと一つ僕に伝えて、それから帰って」っていうふうに言いました。それから三時間待ちました。ずっと

怖がってた子が、しかも、お母さんとしか話したことがなかった子が、事故して初めて僕に「字を書くのが好き」っていうふうに伝えてくれました。「やっと話してくれたね。しかも、お母さんじゃない僕に言ってくれたじゃないか。すごいことだよ。ほら、怖がることない、何も恐れることはない。自分が勇気を振り絞ってやりたいと思うことをやったら、そこから自分が変えられるから。事故に遭った自分をなかつたことにはできない。でも、今のまんまじゃあ自分が好きになれないと思う。なので、自分が好きになるため、まず、周りの人とかどうじゃなく、自分の好きなことを思い切りやっちゃえよ。ありがたいことに、食べなくても寝なくても全然平気だろ。だったら、もう寝たい、食べたいって思うぐらい、ずっとその好きな字、好きなことだけやりなよ」。その子は完全に字を忘れていました。「一つだけお願いをする。年に一度、一文字でもいいから、僕に年賀状を送って。それによって、字をどれだけ楽しんでるか見たいから」っていう約束だけしました。その年に、一文字じゃなくって、その子はもう本当、ボールペン字で、もう幼稚園の子が書いたか、もう幼稚園にも満たないかっていうぐらい、本当何となくな形で、多分あれは、「おめでとう」だったと思います。「おめで」ぐらいまでは読めたので、「おめでとう」だったと思います。そんな感じでした、出会ったのは。でも、すごいですよ。そのきっかけで字を書くことがあって、その子は夢中になってくれました。今の形で、字を書くきっかけを与えた形から五年後に、書道の師範の免許取っちゃいました。五年です。そんな字から、むしろ字を書くことすら忘れてしまったけども、集中です。人間、集中。もう、それが好

きて好きでたまらないって思うことが見つければ、今の自分がすごく変わる。今では、もう全然見向きもしなかったすごく楽しいことを見つかるきっかけを、そんな僕たちよりも、皆さんはもっと持っているように思います。なので、ぜひそういった部分で、知りたい、見たい、聞きたいっていう好奇心を常に持ち続けていただきたいと思います。

○司会 ほかに質問のある方いらっしゃいますか。

○質問者B 貴重な話をどうもありがとうございます。

先生、その事故をされてからどのぐらいの期間で学校に戻られたりしたのかなって。何か、学校に戻られた感じで言うてはったんで、大学の在学中に、そのまんま休学して戻られた感じなのか、また、復学、また大学受験されたのかな。でも、記憶がないって言うてはるから、受験とかもなかなか難しいなと思うんですけど、どんな感じやったのかなと思って、質問させていただきます。

○坪倉 優介 なるほど、ありがとうございます。

僕が、一九八九年、大阪芸大を受けたっていう話をしましたよね。その二か月後、四月に入学して、六月に交通事故に遭った。そこからもう僕、意識がなくなつた。緊急治療室に入っていて、毎日母親が見舞いに来ていたのは、六月中の話です。緊急治療室には僕と同じように、僕が運ばれてすぐに、女の子が交通事故に遭って運ばれてきました。かわいそうなことに、その子は助からなかった。もう僕を心配して泣き崩れている母親の横で、その女の子の母親は、もう泣き崩れ



たそうです。「私の娘の分も頑張ってください」と、言葉にされて去っていったのを、母親はすぐく運命の部分で、忘れられないっていうふうに話してくれたことがあります。

まだ、その時点です。ただ、命を戻した時点で緊急治療室には入ってられないので、診察の部分でいくか、一応命は取り留めたので、家で家族が見て通院するかという部分に迫られたときに、両親は、こんな知り合いも誰もいない、しかも夜になったら真つ暗になるこの場所でこの子を不安な思いにさせたくないから、もう俺の責任でこの子を家に連れて帰るといふうに、もう七月にならないうちに両親は家に連れて帰ってくれました。

僕の本を読んでくれた方いると思うんですけど、本の書き始めの部分です。車で家まで連れて帰ってくれたのに、僕はたしか助手席に乗っているんだと思います。ふっと何となく乗せられて、何となくこんな感じで座ってた僕が目線には不思議な線がずつとついてきて、ぼんと三本になったり二本になったりして。目線的に電柱だけが子どもの頃に見たことがある、知ったことあるって。ずつと線が一本、二本ついていきながら、自分についてきたような感じがするんですよね。それをぼうつと不思議に見ていたのが印象に残って、本の一番最初の書き始めにしました。その状態です、まだ。だから、本当に生まれたてな赤ちゃんのような状態で、とても大学になって行けませんよね、まだ。そこから、ずつと家の中、病室にいたように、家から外には限りなく想像がつかないので、僕は外が怖かった、それまでは。なので、家の中にいたときに、もう母親がずつと付きつきりで、ご飯だのお茶わんだのって教えたけれども、このまんまだったら、いつま

でたつても家の中の範囲、家のものしかいれない。何でも興味を持つているのならということ、父と母は話し合つて、「この子を大学に戻したい」。なので、ちよつと大学一年生のときは、前期、後期分かれていて、年の半分、もう僕自体は、もうその入院やら病院やらで、もうこの時点で前半は既に出席は足りてませんでした。なので、もう授業がどうしようとかこうしようとはもう関係なかつたので、「じゃあ、明日から大学に行かせたらどうだ」と。「待つてください」。まだ僕、ちゃんと歩き方とか、自転車にも乗れないですよ。その状態なんで、母はびっくりしました。「じゃあ、私が付き添つてこの子を大学に連れていっていいですか」。そのときの大きなキーポイントです。父親は止めました。「いや、一切付き添うな」と。「この子は、この体の状態でいく。これが一生戻らない人生を進まなければいけないかつたら、誰かに付き添われなければ何もできない子になってしまう。なので、何ができなくて、できなかつたら、自分でどうしたらいいかつて、一人でできることは自分で考えてさせるために、切符が買えないのなら、自分で切符を買う。その買方すら分からないのであれば、家に電話して親に聞く。そういうふうな行動を教えておかなければ、買方分からないから買つてやる。電車乗り方分からないから乗せてやる。ずっと手をひいて何も考えず何もできなければ、この子の生きている意味は全くないだろう。だから、俺が生きている間、親である以上、先にいなくなるのは親だから、そうなる前に、俺が生きてる間に、この子がどんなところでどんな困つたことになつても助けに行くから、安心してこの子を一人で大学にやれ」。なので、そのまま、もう七月には大学に通うことになりました。

た。もちろん、もうその時点では、全然大学に行けなくって。大和田から電車に乗るっていうときの、あの最初の改札、京阪のあの改札、あの不思議なばっかん、ばっかん、ばっかん、ばっかん、ばっかんという形。大人だから、もう何も気にせずに切符やら携帯当てる行つてますけど、不思議じゃないですか、あの形。皆さんが子どもの頃なかつたですよ、あんな不思議な形の。あれ置いたん、何歳の頃でした？今だから、もう当たり前、もう日常の生活になつたので気にしなくなりませんが、生活のある日、いきなり駅にあれが置かれたときがありましたよね、皆さん。それを初めて、「えっ、ここに切符を通したらいいんだ」って、ドキドキしながらあの改札を抜けた一番最初のときありましたよね。その興奮すら必要なく、頭からこう消されてしまうんですよ、人間って。めちゃくちゃ楽しいのに。それを思い返して、また今日帰るときにばって改札に行つたら、「ああ、これか。ばかばか言つてたな」って、ちよつと笑えるきつかけになつたと思います。もう、その改札だけでもそれですから、電車は勝手にドアが開くので、行き始めたときは、しょっちゅう行方不明になりました。だって、京阪、特に僕は、何度も言うんですけど、大和田から乗るんですよ。階段、同じ形にしか見えないので、「昨日こっちの階段から上がったから、今日こっちの階段で行つてみよう」。「あつ、同じ電車来たから」って乗つてみたら、全然京都のほうに行つちゃうんですね。そんなの知らなかつたので。毎回、「あつ、あつちの階段には絶対行つちゃいけないんだ」とか、やって初めて気づく。そうやって気づいて、自分で学校に行くために、ぐつと親はこらえて、「今日も気をつけて行つておいで」って、いつも家から

見送ってました。「今日も学校に行けなかった。また明日頑張ろう」って言いながらずっと。何とかしたいって思う形でした。

そんなふうにいきながら、一九八九年秋から、だから、ちょうど後期が始まった頃、何とか五回に一回、三回に一回はまだちょっと行方不明になってましたが、大学に行き始めました。そういった形で、絵を描くとか、ものをしゃべる、大学の中で食堂でものを食べる、さらに食事の後、みんなは自動販売機でジュースを飲む。あんなカラフルな箱の中から自分の飲みたいものが勝手に出てくる。魔法のような不思議な、もう当たり前のように日本のあちこちにある自動販売機が、子どもから見たら、もう不思議ですよ。ぴって押したら、いきなり、もう好きなものが現れるっていう。そんなものにドキドキしながら大学に行っていました。また、話す機会がありましたら、そういったところも細かく、自動販売機の初めてのドキドキとか、友達と行った祇園祭での金魚という生き物が泳いでる池の不思議とか、いろんな部分であるんですが、これ全部フルに本に書いているようにお話ししていくと、三か月ほどお話しに付き合ってもらわなきゃいけなくなる。また、その辺は次回のお楽しみにしていただきたいと思いますので、どうもありがとうございます。(拍手)

○司会 本日は、本当にお忙しい中ご講演いただきました坪倉さんに、もう一度、大きな拍手を願います。(拍手)

ありがとうございます。それでは、これで本日の講演を終了させていただきます。